パネルディスカッション

コーディネイター	宇都宮大学農学部	酒井豊三郎　教授
パネラー	宇都宮大学工学部	北 島　滋　教授
	宇都宮大学教育学部	陣 内 雄 次　教授
	高根沢町保健委員会会長	佐間田勝美　氏
	元塩谷広域行政組合	
	ごみ処理検討委員会委員	西 谷 弘 子　氏

黒須課長　※　コーディネイター・パネラー紹介

酒井教授（コーディネイター）

　ただ今からパネルディスカッションに入らせていただきます。今、ごみということをベースに、「ゴミニティづくりをすることで問題のいろいろな解決になる」と北島先生に基調講演をしていただきました。基調講演を直接受けてというのではありませんけれども、パネラーの方々にはまずそれぞれのやってこられた経験等を踏まえて少しお話をいただいて、先程の北島先生のお話に対して、ご意見等もあろうかと思いますが、パネラーのお話が終ったときに、会場の方々とご一緒にディスカッションをしたいと思います。それではまず佐間田さんに、先ほどありましたコミュニティと言うところの絡み等もあって、実際に自分が経験した体験を踏まえましてお話いただきたいと思います。

佐間田氏

　ご紹介に預かりました佐間田です。北島先生の講演がございまして、全くもっともなお話であると思うと同時に、私たち日常的に思っていることをズバリ指摘されてありがたいと思います。とりわけ受益圏と受苦圏に生存する多くの住民が、この話は北海道から沖縄までオールジャパンで、誰でも共鳴する社会学的原理原則だと思います。我々も日常的に保健委員として、また町の下働きとして、ごみをきちんと排出して収集車に確実に積み替え、松島地区の焼却場に運んでいただくために頑張っております。この３万有余の人々の中には、今日ご出席されている皆さんとは違う反社会的な、「ごみは燃せばいいんだろう。出るごみは捨てればいいんだろう。捨てんのは俺の自由だ」という従来型の地球や環境問題から全く隔絶した、独自の反社会的な考えを持つ人が、多くはありませんがどこの集落でも必ず１～２名いて、波及効果をもたらし、多くの良心的な住民に対して迷惑をかけております。ああいう人も平和な家庭で調子よくやっております。僕も反社会的な情報が耳に入ると、冬でも夜の５時半頃から懐中電灯と棍棒とカメラを持って隠れ、違法なごみを持ってきた時には突然立ち上がって、毅然と反社会的な人を退治する、中にはヤーさんも居ましたが。町長がおっしゃったように、そういう役割が単なる環境ごみ行政でなくて自治権であると思います。北島先生が受苦と受益と申しましたが、受苦と受益は集落、向こう三軒両隣、家庭の家族構成、環境教育を受けた子供が「お母さん、そのごみの捨て方間違いだよ」

と母親を注意する実態など、際限なく繰り返される受益と受苦が、日本のオールジャパンで繰り返されてることだと思います。

一つの例として、下手な字で作った僕のステーションの看板をご覧に入れます。ごみは水曜日が出す日なんですが水曜日は朝が早いので火曜日の夜に出す人がいるのです。そうすると野犬や野良猫に食い散らかされて、その辺にごみが散乱してしまいます。うちのステーションは上高根沢小学校の校門の脇にありますが、なぜ校門の脇に作ったかというと、子供たちが通学する時にこういうふうにしてごみはお母さんやお父さん、おばあちゃんやおじいちゃんが持ってきて、どっかのおじいさんがいつも立っていて眼光鋭く極めて厳しくやってんだなと、子供たちの心に５寸釘を打ち込もうとの狙いで、当時の菊地校長に６ヶ月も交渉して校門の脇にこれを作りました。

ここに『前夜はだめ、皆さんの自覚と責任で清潔に整備』と書いてありますが、このフレーズは、何回も色々書いてその都度変えているんです。パッカー車は８時や８時半には来ないですよね、10 時か 11 時頃なんです。そうすると住民は「なんで保健委員の佐間田は８時に来るんだ」町では８時に決まっているんですね。９時頃持って来ると「町の指定袋で８時までに持って来てください」と注意します。毎週水曜日に 120 個くらい集まりますが、名前の書いていないものは今は一つもないんです。でも保健委員を任命された当初は、名前が書いてあるものは一つもなかったんですよ。名前を書くことにすごい抵抗があったんですね。私は以前横浜に住んでいたんですが、その頃ごみ収集の際の事故で、ゴミ袋に裁ちバサミが上向いて入っていて手をざっくり切って大怪我をしたということがありました。それで問題になって必ず名前を書くということが義務付けられたんです。

ここに黒須さんて方がおりますが、この方は芳賀の八ツ木なんですが、芳賀から宇都宮に通っている方がたくさんいます。それと芳志戸、祖母井の方が通るんですが、ステーションが県道の縁なんで通勤の時にごみをどんどん捨てていってしまうんですよね。ごみは地域で処理するのであるのだからこれは許せないわけでして、私の担当区域には４箇所のごみステーションがありますが、そのどこのステーションにも、いくら注意しても祖母井や八ツ木のごみが入っているんですね。これは違反ですから駐在のおまわりさんと連絡を取り合って、ナンバーを控えて、県警に車の所有者を調べてもらい、電話で注意をしました。警察の環境行政と保健委員の環境行政とは一体であると思いますし、警察の権力を背景に行わないと違法投棄はなくならないと、極めて短絡的ではありますがそう考えております。以上でございます。

酒井教授（コーディネイター）

実際にごみをどう出してもらうかという問題も浮上しますが、それでは出す側ということも含めて、西谷さんからお話いただきたいと思います。

西谷氏

私は普通の主婦ですので毎日普通にごみを処理しています。ごみ処理検討委員会に行っていたとき、男性の方が非常に多くて「うちじゃ奥さんがごみはやっているから、さっぱりわからない」と言いながら、いろいろなことを一緒に学んできました。主なテーマがごみの削減減量ということでしたが、

元々のごみを減らすことは私達普通の当事者ではできないので、今あるごみの中で資源にできるものをどうやって増やしていくかということを考えました。まず、塩谷地区ではペットボトルを回収しています。これはごみではなくてリサイクルすることになっているのだから、もっと広めていくような啓蒙活動を行政がやるべきですよね。学校教育の中で子供たちに教え、大人がその見本を示して、ごみ袋に入れずにちゃんとコンテナに入れて出していけば、それを見ていた人がどんどんやっていくと思います。

そして委員会に集まった方で、ごみを減量するための第一歩として、買い物袋を一週間でどのくらい貰っているかということを調査しました。雑誌に載っていたのですが１人当たり１年間に３００枚で、だいたい１日１枚貰っている計算になり、それをごみとして出しているということでした。大きな袋をスーパーへ持って行くと、万引きに間違われてしまうから嫌だという声もありました。私が他の検討委員の方に聞いてみましたら、漫画家の赤星たみこさんは『マイバック』をやってるとのことでした。バックの中にトリセンの袋とかこういう袋を持って買い物に使っているそうです。レジ袋も最近すごく薄くなりまして何回か使うと破れてしまうんですが、１回で捨てるより２、３回使ってから捨てるほうが、１年で 300 枚だったものが 150 枚になるので、そこに居た男性の方も実践してやっていただきました。そこで問題になったのがレジのところで「レジ袋いらないよ、と言おうとしたら袋を開けて待っているので言いにくかった」ということでした。最近トリセンのレジのところに『買い物袋いりません』というカードが置いてありまして、かごに一緒に入れて出せばレジ袋はいらないという意思表示になるわけです。店員さんは「ありがとうございます」と言ってくれますし、なにか良いことをしたような気分になります。

私の経験をもう一つ挙げますと、古紙もリサイクルできるんですよね。以前はごみとして捨てていたものを何とかリサイクルできないかなと考えていた時に、環境課から『ごみの分け方出し方』とい印刷物が出されました。それに従って古紙も出しており、これは今でも忘れた時見るように捨てずに大事にとってあります。

その中で菓子箱ですが、結構頑丈に包装してありますね。トレーに入って、箱に入って、包装紙に包んであります。この中にはリサイクルマークがついていまして、何でできているのか表示のあるものもありましたので、ぜひ古紙に回そうと思いました。そして、わざと菓子の空き箱だけを束ねてごみステーションに出すようにしていました。近所の人にも言おうとしましたが「あんたはおりこうさんね」みたいに言われるのが嫌だったので黙っていたら、ある日、同じように何個か出している方がありましたので、啓蒙するということは言葉でなくても行動で示すことでもできることがわかりました。

優等生みたいなことを言っていますが、私もコンビニエンスストアーを利用しております。あそこでお弁当を買いますとまたも大量にごみが出ます。高根沢のごみが増えたということを聞いた時、真っ先に「コンビニが増えたものね」と思ってしまいました。家で採れたものを食べて自給自足していた時にはごみは出なかったと思いますが、加工されればされるほどごみは出る

のではないかと思います。

北島先生の話にもありましたが、ごみの焼却炉はどんどん良いものができております。打ち合わせの時の話に、焼却炉はここ 10 年位の発展でまだまだ完成されたものではないので、さらにどんどん良いものになっていくということでした。出るごみの中身も関係ありますし、住民としてはなるべくごみを減らして小さな焼却場にして、優しい施設が出来るまで最終処分場をもたせるような生活をしていきたいと思います。

酒井教授（コーディネイター）

やっぱり実践者の言葉は重いですね。話は少し全体論的なところに戻ると思いますが、陣内先生その後を受けてお話をお願いいたします。

陣内助教授

それでは、２人のパネラーの総括的な話になってしまうんですが、北島先生の話の中に出てきた循環型社会というもので、国の方針ではリサイクル・リユース・リデュースですが、行政もいくらかでも資源化しようと努力していると思います。それは、リサイクル・リユース・リデュースということが一般的なことだと思いますが、リヒューズ、つまり断るということも付け加えたいと思います。根本的に私達がいろんな物を買い過ぎることと、利便性とのバランスをどこまで考えるということなんですね。私たちはリサイクル・リユース・リデュースからもう１歩進んでリヒューズ、そんなに物が必要なのかというところを考えなくてはいけないのではと思います。

よく町づくり等のときに話しますが、総論賛成、各論反対というのがありますよね、これはアメリカではニンバイシンドローム（ＮＩＭＢＹ　ＳＹＮＤＲＯＭＥ）という言葉があって、自分の裏庭に来ることは嫌だよいうことで、自分たちの生活全体を考えれば必要なんだけれど、自分の生活圏に作られるのは嫌だということです。

ニンバイシンドロームは何十年も前から言っている言葉ですが、多分今の塩谷地区はそうだろうと思います。これは塩谷地区ばかりではなく全国的なもので、ごみ処理施設とか迷惑施設は課題があるだろうと思いますね。そのときに私達は何をやっていくべきなのか、北島先生の指摘にもありますようにたくさんあると思います。一つ私が感じておりますのは、パネラーの佐間田さんの話の中にあったように、私達がいつか忘れていること、そして私達が日常的に加害者になっていることを、意識化させるということが非常に重要なことだということです。私達はごみのことを考える時は加害者であり、被害者にもなりうるわけですが、一方で改善者にもなりうることです。その時に出発点はどこなのかというと、こういう問題もあるんだよということを意識できる仕組みを作っていくことが重要だと思います。佐間田さんは校門のところにステーションを作って子供が意識するようにと言っておりましたが、それは環境学習の上では重要なことで、それも子供だけでなく、すべての人達の環境学習となります。そのように、これから地域を担って行く子供たちに、しっかりした環境学習をやってもらいたいと思います。

全国いたるところへ、いろんなテーマで聞き取り調査に出かけていくことがあるのですが、その中で重く心にのしかかっている言葉があります。岩手

県の水沢というところに、子供の居場所作りを一生懸命にやっているグループがあります。そこの第１号館がオープンしたので聞き取り調査をやりました。水沢というところは客観的に見て子供達の社会活動が活発なところなんです。子供達が計画段階から大人達と一生懸命にやっていて、そこの中心人物であった加藤君という子の言葉ですが、「なぜ君たちはそんなに地域活動に頑張んの」と聞いたところ、加藤君が最初に「自分達の身の回りに目標とする大人がいるんだ」と言ったんですね。「回りに目標とする大人がいるんだ、だから自分もそういう大人になりたいから地域活動をやるんです。」と言うんですね。要は、環境学習と言わなくても私達大人が日常的な行動とかで、子供たちに対してどういう生活、どういう暮らし、どういう価値観を持って生きていかなければいけないのか示すことができるわけです。今回出ているテーマがごみと言うことなんですが、私たち大人が意識を変えて日常的な行動をきちっとやっていれば、全体的にいろんなものが変わってくると感じています。

酒井教授（コーディネイター）

先程の基調講演で北島先生からお話があって、続いてパネラーの方々のお話があったわけですが、北島先生の方で付け加えることがあればお話いただきたいと思いますが。

北島教授

お二人のお話を聞いていて、宇都宮大学の学生諸君に対して灯台下暗しかなと思いました。宇大生はですね、ポイ捨て、ジュースを飲んだらそこに置く、紙やレジ袋はそこに置くというようにひどいもので、僕は大学ではごみ収集屋さんなんです。大学の中ではそれをやらないと、学生には環境学習が大事だと言ってるし、このギャップをどこまで埋められるかわかりませんが埋めなければなりません。パネラーのお二人のお話を聞いて私自身は頭でっかちなのだと思いますね。ギャップを埋めることは、学生の共感する感受性が強いから可能なのではないかと思いますね。

しかし１年に１回、４日の日は全国的に環境デーでしたので学内清掃をやったのですが、なかなか学生が出てこないんですよね。生協に入ってる学生はかなり一生懸命やりましたが、それでも人が足らないので職員がやりました。

あまり参考にならないお話で申し訳ないんですが、またこの後いろいろ議論に加わっていきたいと思います。

酒井教授（コーディネイター）

ありがとうございました。まだパネラー同士で意見はおありかと思いますが、会場の皆様の中で私はこう思うんだけどと、ご意見のある方はございませんか。

※　挙手する者なし

パネラーの皆さんがきちっとお話をされ過ぎまして、本当言うとパネラーは多少穴があるものですが、今日のパネラーは穴がないんだな、困ったことに。

どうですかどなたか、「自分のところではこんなこともあるんだが」と言う

ことでもかまいません。手を上げにくいのかもしれませんので、パネラーの皆様同士で何かございますかね。

会場（綱川氏（議員））

発泡スチロール等は町で回収してくれるシステムがあるわけなんですが、ああいう軽くてガサのあるものは、持って行こうと思っても持ちにくいなとの気持ちもあるんです。包装で利益を被っている業者と話し合いがあればいいなと思います。

酒井教授（コーディネイター）

今ここに集まっている方は消費者という立場でいますんで・・・実は矢板のときに売る立場の方に参加していただきまして、「結局商売なんです、消費者の方がこれで良いと言い切ってくれればもっと簡単に動けるんですよ」と言ってました。私が話す言葉ではないかもしれませんが、高根沢というところは農が充実しているところで「曲がったキュウリは売れません。買ってくんない」にも拘らず「何でそんなところに手を掛けて」と言う話になることがあります。

使う側から、あるいはごみを出す側から動いていく必要があるが、結局全体のバランスの話なんですよね。僕らも研究会をやるなかで今一番頭が痛いのはそこなんです。正直言って理屈を言うのは簡単なんです。実践していくとなるといつから実践していくのか、実践していかないと多分間に合いません。それがこのシンポジウムのきっかけですけれども、ここに集まって「はい、それでは」とはなりませんけれど。

今の会場からのご意見で、先程の話の中のトリセンですか『買い物袋はいりません』とカードで示すとありましたが、そうなった背景とか理由はご存知ですか。

西谷氏

もともと入り口のところにカードはあったんですね。入り口からカゴに入れていくと、どんどん買ったものが上に重なってしまうんで不便だなと思っていましたら、後日、気が付いたらレジのところに置くようになっていました。これはトリセンさん以外も同じようになっておりますので、スーパー協会かなんかで話し合ったのかなと思います。発泡スチロールの容器なんですが、実は私も持っていくのが大変で、実は１ｍ×２ｍの箱の中に入れてありますので、古紙回収のように回収してくれたらなと思います。

酒井教授（コーディネイター）

このへんのところは、古紙回収と同じような要領でやれば良いのかなと思うところですが、似たようなシステムをどう繰り出していくかが問題ですね。個人の努力で回収するのがまず第一ですが、そんなことも言っていられない部分もあるのかなと思います。やっぱり行政にお願いしなければならないことになってくると思います。

今日いろいろ話を聞いていて行政にお願いする部分が多々ありましたが、今日直接私がまとめてお願いはしませんけれども、十分に聞き取っていっていただきたいと思います。

北島教授

ちょっとよろしいですか、西谷さんにパネラー同士でお聞きしますが、矢板でやった時にさまざまなごみ減量や資源化に向けた試みがありました。その中でスーパーのダイユーさんの話なんですが、マイバックとかの運動が行われた際に２％くらいしか普及率はないということでした。なかなか難しいと言ってまして、ある意味では精神革命みたいなところなんでしょうか。高根沢にあるスーパー等の大型店とかコンビニとかでは、マイバックを持って行くと、キャッシュやポイントがもらえる等の動機付けをしようと、市民や行政からの動きはなかったのですか。

西谷氏

そうですね、あのごみ減量化の生活学校の長をやっている方が、みんなでマイバックを買ったと言っておりました。ポイント制はトリセンはないですけれども、リオンドールやオータニではやっています。

北島教授

ダイユーさんの話ではレジ袋を出さないと「ケチ」と言われるんだそうですね。企業イメージが下がって、ケチと言われると企業経営に響くという難しさがありますね。高根沢の皆さんは水準が高いからそんな「ケチ」なんて言わないと思いますが、いや、矢板が低いなんてことではありませからね。そのような現実があることだけご紹介しておきます。

西谷氏

高根沢の人達もレジ袋を貰っています。もしかしたら２％行かないんじゃないですか。私も毎回断っているわけではありませんで、持っている袋に入りきれない時もありますから、そういう時は貰っております。

北島教授

宇都宮はゴミ袋は有料ではありませんので、そのレジ袋を使ってごみを出しているんですよね。そういう意味では有効活用はしているんですが、逆に大量のごみが排出されているということはございます。

酒井教授（コーディネイター）

買い物袋一つをとってもなかなか話はつきませんけれども、先程出た『買い物袋いりません』というカードですが、皆さん苦労してやっているがなかなかうまくいかないのが現実なんですね。レジの直前に置いてあれば使えるわけですよね。我々抽象的なことを言ってますが、これから先、細かいことを一つずつやっていくことが大事で、佐間田さんの話にあった小学校の校門前に設置したことのように「ここにあれば効果が上がる」ということなのでしょう。我々は、全体論を研究会でやるとどうしても抽象的なことが多くなるけれど、ここで話を聞きながらしたほうが勉強になっています。

会場の方で何かありませんか。

佐間田氏

３列目に座っているロシアの方や韓国の方に、３人の外国の方は今住んでいるところから大学まで通っていると思いますが、毎朝見ている日本のごみ事情とお国のごみ事情の違いについてお話いただけますか。

酒井教授（コーディネイター）

それでは今日の会場に北島先生のところの学生さんと、中村先生の学生さ

んが見えてますので、国際的な比較をちょっとお話いただきたいと思います。

韓国（ハン）

ひとつ紹介させていただきますと、韓国では生ごみの再利用をしているんですが、生ごみに爪楊枝を入れないという運動をしているんです。なぜかと言いますと、爪楊枝を入れますと生ごみを豚などの餌にしますので、それを食べた豚が死んでしまうという事件がありました。食堂のテーブルの上に爪楊枝は置かないで、必要な方はレジのところで貰う形になってます。

中国（カーリン）

中国から来る前から、ごみについて強い関心を持っておりまして、日本はごみの処理や意識が高い国であると思います。中国の今の現状は非常に急速に発展を遂げている国でありまして、13 億の人口がおります。日本ほど裕福ではありませんけれども、これからどんどん発展していくと思います。先進国は裕福に暮らしておりまして中国も真似しようとはいきませんけれども、生活の水準が高くなるにつれ、ごみ問題はかなり深刻になってきております。アイスクリームを１本ずつ食べても日本は１億本ですけれど、中国では 13 億本になります。内陸の農村部ではごみに対する意識がまだまだ低くて、ごみの分別収集が日本並みになるまでには、まだまだかかると思います。ですから今から学校の教育で、先生がおっしゃったように子供のうちからごみに関する学習はかなり必要であると感じています。

ロシア（パウエル）

私は宇都宮大学の大学院１年生です。ロシアのごみの処理の仕方についてお話しますと、日本と比べるともっと簡単に捨てられていると思うんです。多くのロシア人は生ごみを、自分のゼニワークとか畑を持っている人が多いので、冬は大変ですけれど夏はコンポストとして使います。残りの不燃ごみとかも一緒に捨てられて、捨て方も日本ほど複雑ではなくて、いつでも捨てられるようになっていて、決まってる場所に持っていけば焼却されています。

酒井教授（コーディネイター）

今日本以外のところの話をしていただきましたが、会場の方で「この部分どうなってるのか」と聞いてみたい方ございませんか。

会場（綱川氏（議員））

以前韓国へ行ったことがあって、その時生鮮食品のキュウリなどが一本ずつ売られておりました。日本だったら何本かまとめていくらとなってますが、今はどんなふうになっているでしょうか。楊枝の話が出たんで幼児な質問かもしれませんがお願いします。

韓国（ハン）

基本的には日本と変わりないんですけれど、ほぼ共働き家庭なので大量に買うと残って捨ててしまうので、まとめて買えば安くなると思いますけど、高くても残らないように１本か２本ずつ買っている若者が増えている状況です。

酒井教授（コーディネイター）

話を飛ばしてしまいましたけれども、簡単にまとめますと、北島先生から受益と受苦という話がありました。それから西谷さんあるいは佐間田さんか

らもやる気と言いますか、やっていることをどう伸ばすかということで、また同じく陣内先生も結局目標がいるからやるんだということです。ごみの問題は、やる気をどうやったら起こさせることができるかということなんですが、そういう話をするとまとまりにくいので、どうやったらやる気をなくすか、どうやったらごみが出す気がなくなるか、どうやったらごみを散らかすようになるか、そういうふうに考えてみるのも一つの手だと思いながら話を聞いていました。要するにどういうふうにやれば良いというような、いい方向に考えようとすると発想がまとまらない原因になります。先程、佐間田さんが「反社会的なものはどこにでもある」と言いましたが、僕なども偉そうなことを言ってますけれど、いざとなると「まあいいか」となってしまいます。皆さんもこのようなことが多分おありだろうと思います。どうやったら止められるだろうかと考えた時に、そのやる気を起こすのではなく、やる気をなくすことを考えといてそれをやれば、それをやらないようになるのかなと考えながら聞いていました。

もう１つ、陣内先生の話の中に「身の回りに目標とする大人が居れば」との話がありましたが、これは私達大人がやる気を起こすという意味で、通常に子供を育てる時に「子供は背中を見て育つ」といいますが、そうではなく「背中を見せて育てるぞ」という意識を持てということの話かなと思いました。

私がここで、勝手にまとめてしまってはおかしな話なんですが、今日の話のベースの一つに、我々自身が自らやって「こうやればいい」といちいち言わなくても、やっていればそれが伝わっていくのではないのかなと、パネラーの皆さんの話に強く出ておりました。全体の話は北島先生の話にありまして、共感ということ自体も、ある意味では誰に共感してもらうか、どのようにすれば共感してもらえるのかなと思いました。

時間はちょっと早いのですけど、ご意見がなければこの辺で終わりにしたいと思います。